

新成人を対象に募集した「はたちの願い」作文で優秀賞を受賞。
「成人という節目に、生きるということと向き合おうと思って書きました」



平岩美希さん(木戸町)

生きる

平岩美希

生きていくことは、当たり前のことではない。世の中には、産まれてきたくとも産まれてこられない者がいる。病気で命を落としたり、ひどい貧困で餓死していく者がいる。世の中には生きたくとも生きられない者がたくさんいるのだ。住むところがない、着る物がない、食べる物がないなど、人はさまざまな問題を抱えて生きている。生きるということとは、決して簡単なことではないのだ。しかし、日本は恵まれている。食料も住居も教育も、他国に比べて恵まれている。毎日何を何となく過ごしてしまっている私は、その中の一人であろう。いつの間にか当たり前となつてしまつた生きるということ。私は「成人」という節目に、きちんとそれと向かい合いたいと思つた。

私は今、福祉を学んでいる。バイトのデイサービスやサークルの活動で障害児とかかわっている。彼らのとても純粋で、真つ直ぐなところが好きだ。日々、彼らからいろいろなことを学んでいる。例えば、電車が好きな子どもは、地下鉄の駅の名前をすべて覚え、電車に関する疑問をどんどんぶつけてくる。また、肢体不自由な子どもは、汗を流しながら必死で歩行訓練をがんばっている。そういった一つのことを極める姿勢や、何事にも一生懸命な姿勢の彼らを見ると、生きるとはこういうことなのだ、毎回思われる。

ある日、子どもが教えてくれた。「私は未熟児で仮死状態で生まれたの。すぐにNICU(※)に運ばれて、呼吸器とか付けられて、今日が山場ですつて言われたんだ。だから、私が今生きているのは奇跡なんだよ。」この話を聞いて、私は昔のことを思い出した。

かつて、なぜ自分が生きているのか、何のために産まれ、生きなければならぬのかと、考えていた時期があった。毎日が風のように、色もなく、すつと過ぎていった。いくら自問自答しても答えの出ない悩みだった。

私は、臍(へそ)の緒を首に巻き、仮死状態でこの世に誕生した。別に危険な状態ではなかったが、ほかにも左足首が内側へ曲がっていたりと、いわゆる普通の状態ではなかった。しかし、私は今の障害もなく育ち、小学校から高校まで陸上部員として、この足で走り回ってきた。あの時、呼吸をしたから、足が真つ直ぐに治つたから、今の私がある。今の私が存在するのは、偶然が重なつた奇跡なんだと感じた。その時、気が付いた。私の周囲には、いつも私が帰ってくるまで口うるさい父や、受験を控えていた時、私には黙つて毎日合格祈願に行つてくれた母、たわいも無い話をいつも聞いてくれる友など、私を思つてくれていてくれる人がたくさんいる。五体満足に産まれ、周囲に支えられ、私はとても幸せだ。それが分かつた時、出口のない悩みの答えを見つけた。

ることができた。人は皆、人のため、自分のために生きていくのだ。生きることは、当たり前のことではない。しかし、人はそのことを見失い、戦い、殺し合う。生きていけば、さまざまな困難が降りかかってくるだろう。しかし、そこで生きる意味を、奇跡の大切さを見失つてはならない。人は生きるということと常に向き合つていかなければならないのだ。

私は将来、障害児とかかわる職に就きたいと考えているが、そこには、どんな困難が待っているのだろうか。たとえ、どんな困難にぶつかったとしても、私は生きる意味を見失わず、強く生きていきたいと思う。人のため、自分のために。

新生児特定集中治療室。

広報掲載にあたり、応募された作文から一部を要約しました。

そのほかの
優秀賞受賞者

- 岩崎 嘉代(城ヶ入町)
- 中村 瑞枝(大東町)
- 森山 百合香(大東町)

順不同 / 敬称略



その44

桜井凧とともに
風とあそぶ



いろいろな桜井凧



昨年の凧あげ大会の様子
(今年は1月27日(日)午前9時受付)

今月の表紙にもなっている桜井凧みなさん知っていますか?「お菓子のパッケージになつている」と答えたい人、正解です。では、実際の桜井凧を見たことがありますか?安城市の南東部桜井地区で、百数十年前から作られている桜井凧は、カラフルな色やデザインから、室内インテリアとしても用いられています。もちろん凧としても優れていて、風を集める風袋(袖)を持つことから、弱い風でもよくあがります。

今から6年前、桜井凧の最後の作者が、病に倒れました。桜井凧の存続が危ぶまれるなか、歴史博物館で企画展が開催されるとともに、わたしたちのまちの文化はわたしたち自身で伝えていこうと、市民が誰でも参加できる保存会の結成を呼びかけたのです。すると、子どものころ桜井凧をあげていたという人々が集まり、その製作技術の伝承と地域の活性化、他団体との交流などを目的とした桜井凧保存会が誕生しました。

現在、隔週日曜日に桜井公民館に集まり、講習会を開いて製作技術を磨いています。同時に、各地の学校で凧づくりの指導も行っています。また、毎年1月下旬には、矢作川の小川天神緑地公園で凧あげ大会を開催しています。特に今年、保



桜井小学校の児童たちが
桜井凧作りに挑戦



存会結成5周年ということもあり、日本の凧の会長茂出木雅章氏の講演会(1月13日(日)午後1時・デンパ1ク)も開催します。

実は、東海地方は「凧銀座」と呼ばれるほど、様々な独自の凧があります。そして、それぞれの地域では、自分たちの凧文化を伝えていこうと、それぞれの凧保存会が活動しています。2005年の愛知万博では、愛知県内の凧保存会が集結し、一大イベントを開催しました。こうした交流活動は万博以外にも頻りに行われていて、行く先々では熱の入った凧談義が繰り広げられています。その

中で、桜井凧はわたしたちが考えていた以上に人気がありました。思わぬ評価に、ついつい得意げになつてしまいます。

隔週日曜日の凧づくり講習会は、誰でも参加できます。みなさんも、わたしたちと一緒に桜井凧をつくつて、風とあそんでみませんか。桜井凧とともに風とあそぶ風景、それはわたしたちが「ふるさと」を感じるこのとき、かけがえのない財産のひとつだと思つています。



今月の案内人
桜井凧保存会のみなさん